

中等教育における男性家庭科教員に対するインタビュー調査

家政教育講座 中田 忍（申請代表者）

家政教育講座 大本 久美子（分担者）

事業の目的

戦後誕生した中等家庭科教育の歴史を振り返れば、選択的男女共修時代（結果的には女子のみ履修）を経て、女子のみ必修時代へと移行した。その後「女子差別撤廃条約」への批准を契機に、実質的な男女共修が実現して現在に至っている。学習者である生徒の男女共修が進んだ一方で、指導者である教員は女性が大半を占めており、本学受験者・入学者の男女比も大きく偏っている。

しかしながら、近年、本学大学院・学部の男性修了生・卒業生の多くが、大阪府教員採用試験（高等学校および中学校）に合格し、正規家庭科教員として就職している（一部は特別支援学校に勤務中）ことから、求められる資質を備えていれば、教育現場が男性家庭科教員を忌避していないことは明らかである。

そこで本研究では、本学大学院・学部を修了・卒業し、教職に就いている教員及び在学中の学生へインタビュー形式で、家庭科教員を目指した動機や周囲からの反応、就職後の状況及び生徒からの評価等について聞き取りを行った。彼らは男性家庭科教員のロールモデルであり、彼らの意識や実態を整理することによって、今後家庭科教員を目指す可能性のある男子高校生に対して、有益な情報を提供できると考えた。

調査結果の概要

調査対象者（協力者）は過去5年間に本学大学院・学部を修了・卒業し、教職に就いている教員5名（中学校教員1名、高校教員4名）、および在学中の学生3名（大学院生、4回生、3回生各1名）の計8名（全員男性）である。

調査時期は2013年2月、実施場所は本学柏原キャンパスおよび天王寺キャンパスである。調査は半構造化インタビューによって実施した。また、同時に録音、一部ではビデオ撮影も行った。

主な質問項目は以下の4点である。

- ・大阪教育大学の家政教育専攻を受験しようと思った動機
- ・入学後の感想
- ・家庭科の教師になりたいと思った（思う）理由
- ・（現職教員に対して）実際に家庭科教員になってみての感想

1. 本学への志望動機は、高校時に教員志望であったことがおおそ共通することであった。そこから家庭科専攻を選択した理由は各人さまざまであった。関連他分野を勉強中に家庭科教育に興味を持った、普段の生活に密着した教科内容に魅力を感じたといった理由の他、高校の家庭科教員の影響や男性家庭科教員にパイオニアとしての価値を見出

したという意見もあった。入学時は小学校教員志望であったが、在学中に家庭科が好きになって家庭科教員（高校）になった者もいた。出願時に周囲から家庭科専攻を受験することを驚きの目で見られたとの回答もあった。

2. 入学後は、男性であることで取り立てて不都合はなかったと全員が回答していた。専攻学生では男性は少ないものの、クラブ・サークル活動に参加することで男性の友人もでき、孤立感はなかったようである。また、男子学生が同学年に複数在籍することが近年多くなっていることや、男子上級生との個人的な交流も大きな要因と思われる。また、当初は戸惑いがあったものの、かえって少数であることに価値観を見いだしたという発言もあった。
3. 卒業後の進路に家庭科教師を選択した理由は、「家庭科が一番楽しい、教えが面白いがある教科と思っている。自分が楽しくないと、教えるのも嫌だと思っていたので、家庭科しかない」「家庭科なら料理と裁縫はできるの？」みたいな話をよくされるが、家庭科はそれだけではない。だから、“料理と裁縫=家庭科”といったイメージも崩したい」などが多かった。
4. 教員になった感想についてはほとんどの修了・卒業生が「高校では生徒よりも、同僚の教員側から珍しがられた」「家庭科だから、生活のことだから、生徒と雑談はなんでもできるし、自分の話を聞いてくれている。自分の生活に沿った会話ができるのは、他の教科ではなかなかない」「時代が変わっていくと家庭科の内容はすぐ変わるし、考え方も変わると思うので、日々勉強していかないといけない」「座学と実習が両方あり、身近な学問で教材がどこにでもあるので生徒と一緒に寄り添って勉強でき、生活全般で必ず役立つ」など、家庭科の教科特性を魅力として語った。

本調査の協力者は、積極的に本学の家庭科専攻を受験し、現職の家庭科教員（または家庭科教員志望）である。したがって家庭科に対するポジティブな回答が得られたことは想定できたことである。さらに、彼らが在学中に困難を感じたことがないことは、周囲の学生（特に同じ専攻の女子学生）や教員が彼らを意識して特別扱いしなかったことも、一要因と考えられる。

また、家庭科教員として教壇に立った際にそれほど生徒からは奇異の目で見られなかったのに対して、教員側の反応が大きかったことは特筆すべきことであろう。大学進学時に家庭科専攻の受験に対して周囲から疑問を呈されたとの回答も含め、社会一般における家庭科教師＝女性教師との認識の強さが表れている。

彼らは男性家庭科教員として後に続く男子高校生に対して優れたロールモデルになると思われ、その活躍が今後、家庭科教員の男女比の偏りの是正にも貢献するものと期待される。